

米原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く

128

米原市の石塔②

―五輪塔・層塔―

五輪塔は丸三角四角

五輪塔は、仏教で万物の構成要素とされる空、風、火、水、地の五大思想を、上から宝珠形、半円形、三角形、円形、方形で組み合わせた塔です。室町時代以降、墓石として建立された五輪塔は、共同墓地や境内墓地、辻堂や路傍などいたるところに、多くは四つの部材がばらばらになった状態でみられます。その質と量は、近江に生きた庶民の厚い信仰と経済力を感じさせます。十六世紀以降にはひとつの石に刻んだ一石五輪塔や、板状の石に浮き彫りにした五輪塔板碑が流行しました。

平野神社（弥高）の五輪塔は「大永



▲北条仲時塔



▲大谷吉継塔

八年（一五二八）僧實佑」の刻銘があり、典型例といえそうです。妙覚寺（小田）にも、文永二年（一二六五）、正安二年（二三〇〇）、永享七年（一四三五）の

年号をもつ二石五輪塔（市文化財）があり、永享塔には小田の鋳物師「八田部共義」の名が刻まれています。しかし、塔の形式は室町時代後期から末期のもので、刻まれた年号との差異があります。

元弘三年（一三三三）、鎌倉幕府の六波羅探題・北条仲時は、京から鎌倉に逃れるために東山道（中山道）を北上しますが、番場で先帝龜山上皇の皇子を担ぎ出した北近江の武士団や伊吹

山の僧兵、山賊が行く手を阻み、総勢四三人が蓮華寺にて自刃しました。境内には一行の墓とされる五輪塔が並び、仲時の五輪塔は、蓮華寺を望む六波羅山の山頂にあります。そのほか、市内には後鳥羽上皇の一ノ宮皇子や大谷吉継、今井氏や新庄氏などの五輪塔があります。

笠を積みあげた層塔

層塔は仏教伝来に伴って木造の塔が伝わり、石造塔も伽藍の一部を構成する仏塔として、奈良時代に始まり、近江では鎌倉時代中期から盛んに建立されました。塔身の四方に仏像を刻み、三・五・七・九・十三重の塔があり、無限に広がる数字として仏教で尊重されます。

市内の層塔では、松尾寺（上丹生）と、その登拝口にあたる八坂神社（三吉）に優れた作品がのこっています。松尾寺の九重塔（重要文化財）は、旧松尾寺本堂跡の背後にあり、基礎の部分



▲八坂神社塔

の背面に「文永七（一二七〇）庚午年八月日」の銘があります。ほかの三面には、格狭間の両側に宝瓶に挿した蓮を刻んだ古い図柄がみられる、完形の優品です。八坂神社の九重塔（市文化財）は、基礎の正面のみ格狭間内に三本の蓮を刻みます。軸部の四方に仏像を半肉彫りし、元亨三年（一三三三）の銘があります。

朝妻神社の層塔（市文化財）は、現在は三層となっていますが、もとは五層か七層だったと思われます。鎌倉時代後期でも古い段階のものと考えられます。伊吹山四ヶ寺のひとつ太平寺の石造物として、山腹から移された大平観音堂境内の石仏・石塔群の中には、三重の層塔があります。泉明院（柏原）の本堂南の山の尾根上には四層の不完全な層塔があります。文様の無い軸部の上に層塔の塔身と笠がのり、四層目は宝篋印塔の笠です。

（歴史文化財保護課）



▲朝妻神社塔